

自分を取りまく社会や環境に興味をもち、多面的な見方や考え方を身に付ける子供の育成

田中雅子¹尾崎隆宏¹・小山富見男²

¹鳥取大学附属小学校

²鳥取大学地域学部（非常勤）

社会科部では、社会的事象を多面的にとらえ、社会に参画できる子供の育成を目指す。そのために、子供の視点や考え方を広げることを目的とした教材として、プラス1（新たな社会的事象・事実）を提示し続けた。特に今年度、プラス1として効果的な内容選定と提示法の基準について考えた。プラス1の提示前と提示後の子供の考えや見方の変化、そして学習活動の広がりについて検証を行った。その結果、プラス1の内容として効果が見込まれる基準として、①教科書に載っていないもの、子供たちの普段の生活からは気付くことが難しいもの②プラス1を提示した後、子供たちが考えを確かめるための資料が準備可能なもの③学級や子供たちの知識や情報量によってプラス1は変化するため、年度当初に設定するのではなく、単元ごとに子供の実態に合わせて設定すべきものという、3つのポイントがあることが分かった。

キーワード：プラス1

1 はじめに

1.1 社会科の未来へつなぐ授業づくりの視点

1.1.1 社会科特有の見方・考え方

小学校学習指導要領解説社会編（2018）において重要視される「社会的な見方・考え方」とは、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法であると考えられる。そこで、小学校社会科においては、「社会的事象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり、総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」を「社会的事象の見方・考え方」として整理している。

1つの社会的事象について考えると、地理的環境、位置、生態系、文化、人、防災等、様々な背景を読み取ることができる。さらに追究を深めると、歴史、経済、産業等、それぞれの立場で考え方、生き方が異なり、一方からの見方・考え方のみでは、測れないことに気付いていく。この現在の事象と背景、そして未来への結び付きを考察することができるのが社会科の特色である。

1.1.2 社会科の提案する学びのプロセス

「プラス1の教材づくり」

導入時の話合いや想像のみでは結び付けることが難しい見方や思考を引き出すため、ゆさぶりとなる資料や事象、発問を提示する。図1は、中田（2013）が示した学習問題づくりへの流れである。例えば、「漁師が海を豊かにするために、山に木を植える」など、子供からみると、一見つながりがない事象や予想と反する事象を「プラス1」として示すことにより、子供のおおよその常識を覆したり、背景や人々の意図に対して新たな気づきをしたりするなど、思考をより深めることが期待できる。本校ではこのようなプラス1の提示により、子供

自分を取りまく社会や環境に興味をもち、多面的な見方や考え方を身に付ける子供の育成が変容するのではないかと仮説を立てた（図2）。そして、プラス1を定義付け、どの単元でも提示し続けることによって、子供の社会的事象に対する見方・考え方がより多面的になり、さらに学びを追究することができる考えた（図3）。

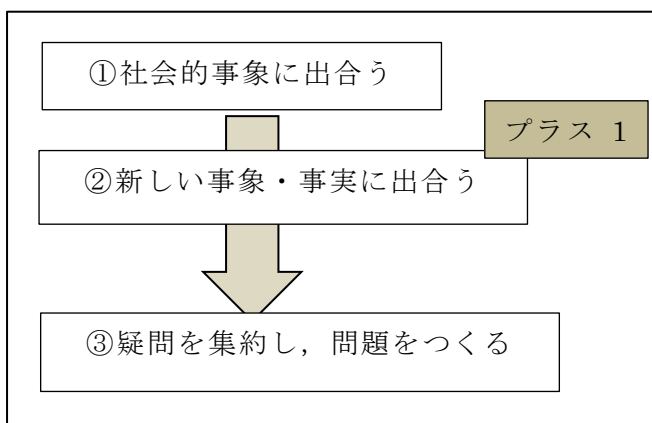


図1 学習問題づくりは3step（中田，2013）

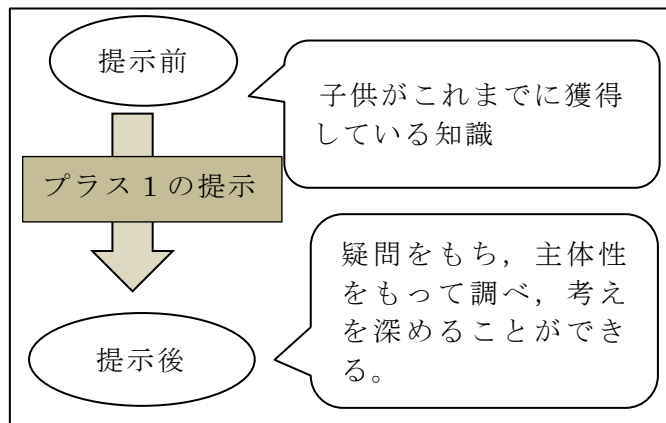


図2 プラス1のイメージ（本校社会科部作成）

プラス1とは
 子供の予想や先入観を覆す社会的事象

プラス1の提示方法
 具体物、写真、グラフ、図などの資料によって提示
 学習内容に関わる人々や関係者の言葉によって提示
 発問などや事象の説明などでの現象の紹介によって提示

プラス1がねらう子供の変化
 「プラス1の提示までには考えもしなかった」と、新たな見方・考え方に気付く
 「なぜだろう」「何があったのだろうか」「何のためだろう」と、疑問に感じる
 「もう1度考えてみたい、調べてみたい、話し合いたい」と、さらなる追究につなげる

図3 プラス1の定義

1.2 社会科の未来へつなぐとは

社会科では、資料から気付く、疑問にもつ、調査する、情報を収集する、整理する、取捨選択する、伝達する等、情報をもとに思考を深める学習活動を展開することができる。そして、本校社会科部では、学習活動の中で3つの力の育成を考えている。

- 資料と自分の知識や思考をつなぐ「情報収集・情報活用能力」
- 社会的事象に対する背景・原因・因果関係をつなぐ「広い視野」
- 他者と意見を交え、考えをつなぐ「自己決定・自己選択」

これらの力は、子供が将来、未知の情報や社会的事象と向かい合ったとき等、課題解決の力につながると捉えている。これが社会科における「未来へつなぐ」である。

2 問題の所在

2.1 子供の姿

3年生4月初日の教科書配布の時間、理科と社会科という2つの新しい教科との出会いの瞬間である。どの子供も「どんな勉強なのだろう」と、目をきらきらさせながら教科書を開いていく。ところが、4年生以降になると、「社会科は苦手」「社会科は嫌い」という声を聞く

ことがある。有田（1989）は、学習と子供の意欲の関係を「北風と太陽」に例え、熱心に教え込もうとすればするほど、子供に「北風を送っている」と指摘する。有田は、「北風」とは「教え・分からせ・理解させる授業」であり「受け身の授業」であると述べている。

子供の前年度までの学年、学級なりによって実態は大きく異なるが、この社会科離れの理由には、「受け身の授業」に加え、次のような理由により、子供の実態に差ができやすいと仮定した。

- 1 学年が上がるに従い、学習内容が全国、世界となり、素材を直接確かめることが難しい。学習内容が身近でなくなる。
- 2 地理や時事、歴史などの学習は、日ごろから興味をもち、意欲的に情報を得ている子供にとっては楽しいが、そうでない子供にとっては受け身になりやすい。
- 3 覚える言葉が多く、教科書や資料集も専門用語が多い。学習内容に関する話についていけない。一方、得意な子供は、どんどん覚え、授業をリードすることができる。その差から、意欲を継続するのが難しくなる。

授業の中で、事象の教え込みが学習の中心となれば、当然子供は受け身となる。地名、社会的事象、歴史人物などを次々に子供に定着させる必要がある高学年の社会科では、そのことがより顕著に表れやすい。また、中学年の後半では、特色がよく表れている他県の事象が教材となって教科書に載っている。しかし、実際には各都道府県内の特色や様子について学習を行う。従って、県内各地の特色を捉えた地域教材を準備する必要があり、その選定が難しい。

一方で、系統性を見通しや教材の選定が不十分なまま体験活動や具体物の紹介などを多く行えば、授業の表面上は楽しそうに見えても、子供の思考が深まらない授業となる。そこでプラス1を活用した学習活動が必要になる。では、どのような条件を満たせばプラス1の学習活動として効果があるのか、教材として成り立つのかを考えていきたい。

2.2 昨年度までの研究

本校の研究テーマ「未来へつなぐ教科・領域の授業づくり」に沿って、社会科では、研究初年度「自らの生き方を考える子供が育つ社会科学習」をテーマに、「社会的事象の意味を多面的に考えるための手立て」「調べたこと、分かったこと、考えたことを根拠として示しながら説明する学習活動」「子供たちが自ら学ぶための授業づくり」の3本を柱に据え研究を行った。

2年次は、3本の柱の中の「社会的事象の意味を多面的に考えるための手立て」に焦点を絞り、「自分を取りまく社会や環境に興味をもち、多面的な見方や考え方を身に付ける子供の育成」をテーマとした。そして、プラス1を単元の中で提示し、それまで子供がもっていなかった視点に気付かせ、思考を深めることや多岐に広げることを意図する活動に取り組んだ。その結果、プラス1の提示によって子供の見方・考え方が変化する様子を発言や議論、ノートなどで捉えることができた。また、社会の中での人々の取組を全て肯定的に把握していた子供が、未来に向けて「何が良くて何が課題か」を具体的に考えるなど、社会的事象に対する子供の意見に変容が見られた。

3年次は、プラス1の提示の仕方について整理を図った。実践と検証をもとに整理した結果、提示の仕方には、具体物、写真、グラフ、問いかけなど、いくつかの方法が挙げられた。プラス1の条件としては、「〇〇だったのに、△△になるのは何故?」「この変化の前には何があった?」など、子供が不思議に感じる要素となることが大前提である。そして、社会的事象や変化を突きついたり、比較をしたりすることを通して、子供たちに疑問を沸かせ、思考を深めさせることが重要であると考えた。

その一方、プラス1を提示する前から、子供たちが社会的事象に対して既に複数の視点や考えをもっている場合があった。その場合、提示の必要性和効果が薄いケースが何度かあった。子供の実態によって必要なプラス1が変化していくということが分かり、課題となった。

3 研究の目的と方法

3.1 研究の目的

4年次に当たる今年度は、プラス1として効果的な内容選定と提示法の基準の作成を行っていく。効果的な提示の仕方、内容について、柱となる基準を確定すること。また上記の課題のように、もし、学習の流れの中で、子供たちが既にプラス1の提示目的に当たる見方・考え方をもっているときはどうすべきか。プラス1を設定するための手段と原則を探ることが本年度の研究の目的である。

3.2 研究の方法

単元内の子供たちの変化について、行動観察、発言、ノートなどを中心に継続して記録する。プラス1の提示前と後では子供たちの見方・考え方に変化があったのか。そして、変化は多面的な見方・考え方へとつながるものであったのか。さらに、変化した場合も変化しなかった場合も、何が原因となったのかを考察・分析する。これにより、プラス1が社会科の指導法として一般的に活用されるように、その効果的な条件と基準を明確にしていく。

4 総合考察

4.1 結果

4.1.1 検証授業（1）「はたらく人とわたしたちの暮らし～店ではたらく人～」の実践（第3学年の取組）

プラス1のねらい

スーパーマーケットで販売されている品物は、国内だけでなく海外の品物も多い。子供たちは日頃から店頭や広告で生産場所を知ることができ、あらゆる地域から品物が手に入る便利さは感じているものの、その理由については学んでいない。そこで、これまでに家庭で聞き取りをしたことやスーパーマーケット見学で調べたこと、広告などの資料を手がかりとして、いろいろな産地から品物が集まっている理由について多面的に考えさせていきたいと考えた。

調べたことや話合いから、子供たちは国内外のあらゆる地域から品物が届き、消費者が便利で豊かな生活ができることを実感する。しかし、子供たちが見学したスーパーマーケット内には地産地消の売り場が設けられている。また、その他のスーパーマーケットでも広告や値札に「地物」（鳥取県産）を表示したものを多く目にする。

そこで、今回はこの「地産地消」をプラス1として提示することにした。あらゆる産地から欲しい品物が手に入るのに、なぜ、地元の品物にこだわるのか。形や大きさが不揃いであるにもかかわらず、売れる商品なのか。価格も決して安くはない。このことを切り口に消費者のニーズや、地域の中のスーパーマーケットとしての役割を考えた店の働きを理解させたいと考えた。

提示前の子供の考え

導入で品物の産地クイズをした。これまで、広告をもとに品物の産地調べをしたり、スーパーマーケット見学の際に、実際に売られている品物の産地を調べたりしてきた。そのため、本時の導入の産地クイズでも、子供たちは品物があらゆる場所から届いていることを振り返り、確認していた。遠くからでも品物を取り寄せている理由を子供たちは以下のように考えていた。

- ・鳥取県では、とれない品物がある。
- ・その県の有名な食べ物はおいしいので、味わってもらいたい。
- ・日本では手に入らない品物があるので、外国から取り寄せている。
- ・他の県や外国の品物も食べてもらいたい。
- ・それぞれの好みの味を見つけて欲しい。

地産地消コーナーがあることは、見学のまとめでも子供たちから出ていたので、ここでプラス1を提示することにした。

プラス1の提示

【なぜ、地産地消の売り場があるのだろう。】

県外や外国など、遠い場所、あらゆる場所から品物を取り寄せているにもかかわらず、なぜ、地産地消のコーナーがスーパーマーケットの入り口に置かれているのだろうか、と子供たちに問い掛けた。

プラス1の提示後、まずは、個人でワークシートを書く活動を入れたが、1人で考えることが難しい子供がいたので、近くの友達と話し合う時間を設けた。子供たちから出た意見は以下のようなことだった。

- ・ 県外の品物を買いたい人もいるが、鳥取県産の品物を買いたい人がいる。
- ・ 鳥取産の良さを改めて知って欲しい。
- ・ 鳥取県産を目立たせるために、売り場がある。
- ・ 鳥取の味を鳥取の人に忘れないでいて欲しい。
- ・ 鳥取にいるならば、鳥取の品物を食べて欲しい。
- ・ 味ではなく、外国産の品物より安心できるから。

ここで、外国産に比べて地元鳥取産の品物は、安心できるという意見が出てきた。

この意見は、他の意見とは違う角度からの見方であったので、もう少し詳しくその子に聞いてみた。「外国産は農薬の面で危険があるかもしれないが、地産地消は作った人（生産者）の顔写真が品物に貼ってある。」ということであった。加えて、母親もそのことに着目して品物を選んでいることを知っていた。この意見は、私が提示しようと考えていたことだったので、さらに、写真を資料（図4～6）として全体に提示した。



図4 生産者の顔が見える品物



図5 無農薬の品物



図6 生産者が明記されている品物

そして、子供から出た意見を①味の好み②新鮮、③おいしい、④安全（生産者の顔や名前が見える）とまとめ、お客さんが品物を選ぶことができる、と結論付けた。

さらに、子供たちの検証が正しいかどうか、見学先のスーパーマーケットの店長に答えていただいたビデオを視聴した。このビデオには、消費者の要望に対応するだけでなく、地域のスーパーマーケットとして地元の生産者を応援していきたいという店長の思いが込められていた。このことにより、消費者の要望だけでなく、売り手側の考えや思いに気付かせることができた。

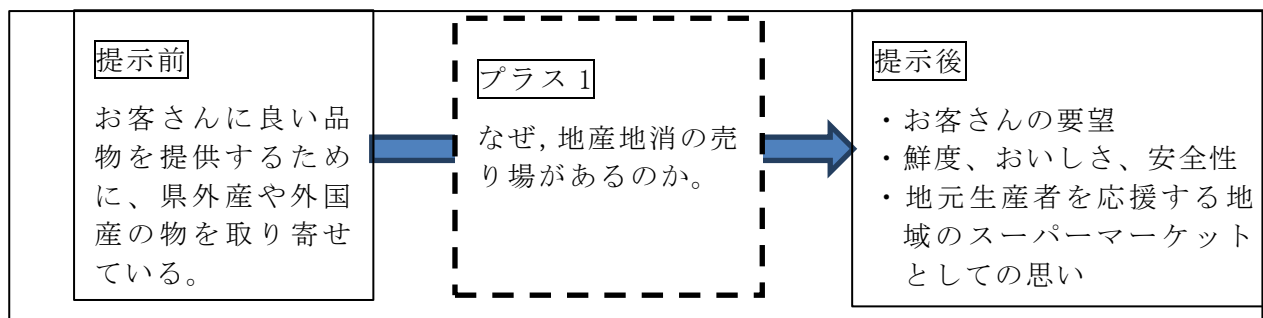


図7 子供の思考の流れ

4.1.2 検証授業(2)「明治の国づくりを進めた人々」の実践(第6学年の取組)

プラス1のねらい

ペリー来航以前の外国船の来航の頻度を読み取ることができる「日本に来た主な外国船と開港地」を社会科資料集(日本標準2020)より抜粋し、プラス1として提示した(図8)。江戸時代に日本に来た外国船は、ペリー来航時が初めてではない。1778年から1853年の間にロシア、イギリスなどの外国船が複数回姿を見せており、アメリカの船も1837年、1846年と2度来ている。幕府は、1825年に「異国船打払令(外国船の追放命令)」を発令し、1842年に「薪水給与令(外国船の来航に際して薪水や食料を給与する命令)」を出している。なお、1804年にロシア、1844年にオランダが日本に交易、開国を求めてきている。1846年には、アメリカからジェームズ・ビドルが開国、交易を求めたが、幕府は全て拒絶している。そして、1852年には鎖国の対象となっていなかったオランダから、「ペリー来航の予告」の情報が日本にもたらされていた。よって、ペリーの来航は幕府にとって、急なことではなく予想されていたことである。それまで外国船が日本に来ても、中国、オランダ以外の国とは交易をしなかった幕府が、なぜペリー来航で開国をしたのか。その理由を追究することを通して、背景である歴史的事象や世界的情勢について考えさせた。

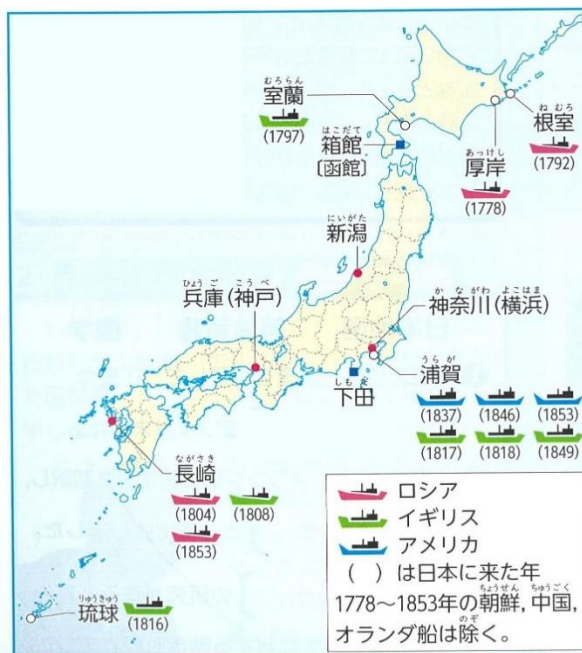


図8 日本に来た外国船と開港地

提示前の子供の考え

学習前半には、教科書(東京書籍2020)の資料「ペリーの上陸」(図9)からペリーの2度目の来航の様子について気付くことを話し合い、幕府が条約を結んだ理由を予想した。そこで出た意見の多くは次のようなものであった。

- ・黒船と大砲の大きさに驚いた。
- ・こんなに大きくてすごい技術の船に乗ってやってくるということはアメリカの力が大きいと考えた。
- ・戦ったら勝てないと思ったから。
- ・開国をしないと日本が外国と比べて文化や交流に遅れるから。
- ・ペリーが強い姿勢でせまったから。

教科書の文面も、「ペリーの強い態度と軍艦や大砲の大きさにおどろいた幕府は、翌1854

年、日米和親条約を結んで国交を開き、鎖国の状態は終わりました」と記されている。子供たちの予想の中にも教科書に近い意見が多く出た。

しかし、ここで1人の子供が、「このころ、中国とイギリスの間でアヘン戦争があった。この戦争で、イギリスやアメリカが強いことが分かって、日本も戦ってはいけないと思ったから。」という意見を出した。この意見は、教科書の文面からは読み取ることができない、世界情勢に着目したものであり、当時のアジアに激震が走った重要な歴史的事象である。プラス1を提示する前に世界情勢について意見が出てくるのは予想外であった。事前に予定していた通りにプラス1を出すべきか否か…。指導者も戸惑ったが、アヘン戦争は他の子供にとっては未知の内容であること、また、開国の要因は複数であること、さらにはペリー来航が初めての外国船来航ではないことに気付かせたいという理由から、プラス1をこのまま出すべきと判断した。



図9 ペリーの上陸（横浜）

プラス1の提示

【資料「日本にきた主な外国船と開港地（資料集）」から気付いたことを発表しましょう。】

プラス1の資料を提示し、まずは、気付くことを伝え合った。子供たちからの意見は次の内容であった。

- ・ペリーより前にも何回も外国の船が来ている。
- ・太平洋側の港に比べて日本海側の港にはあまり船が来ていない。
- ・浦賀にたくさんの船が来ているのは、江戸に近いからだと思う。
- ・これだけ船が来ていたら、日本にとって外国の船はそんなに珍しくはなかったのかもしれない。でも、現地の人から見たらやっぱり珍しいのかもしれない。
- ・アメリカも（ペリー1度目の来航を入れて）3回日本に来ている。
- ・なぜ、ペリーのときに幕府は開国をしたのだろう。
- ・なぜイギリスやロシアが何回も来ているのか。

ここで、子供たちから、他の国からも複数回船が来ていること、アメリカからもすでに来航していることも出てきた。また、ペリー以前では開国をしていなかったことに対する疑問が出た。

【それまで開国をしなかった幕府が、ペリー来航のときには和親条約を結び、開国をした理由を年表から調べましょう。】

幕府が開国をした理由について、自分の予想を検証するための資料として、年表「江戸時代末期・幕府と外国に関わる資料」（自作）を配布した（図10）。その結果、年表内の歴史的事象をもとに、子供たちは複数の理由を考えた。

- ・アヘン戦争の結果によって、幕府は開国を拒否するのは無理だと思った。アメリカやイギリスと戦うことはできないと考えた。
- ・モリソン号事件の後、幕府は「異国船打払令」を止め、「薪水給与令」に関わり方を変えた。この頃から考えが変わってきたのかもしれない。
- ・やっぱり黒船や大砲ペリーの態度などから、力の差を感じ、断り切ることは難しいと考えた。
- ・幕府も意見を各藩に聞いていったと書いてあるから、幕府も迷っていて考えが変化した。それに、国をまとめる力がぐらついてきたから。
- ・お土産が豪華で、アメリカの技術や文化がすごいと思ったから。

学習活動の結果、子供たちは、教科書のみでは結びつかない様々な理由を出し合い、開国とつなげて考えた。

これにより、開国の理由は、ペリーの態度や軍艦のみでなく、様々な要因と考えが絡んでいたことを子供たちは理解した。

江戸時代末期・幕府と外国に関わる資料
(青字は外国から日本へのこと 赤字は日本から外国へのこと)

1804年	ロシアの「レザノフ(人物)」が長崎へ来航(やってきました)。日本と開国を求め、幕府は開国を断る。
1806	開国を断られたロシアが、軍艦で薩長を襲撃(襲って来た)する。
1807	幕府が、『ロシア船打払令(ロシアの船を攻撃して追い払う命令)』を出す。
1808	イギリスの軍艦【フェートン号】が長崎に侵入する。長崎にいるオランダ人を人質に取り、水・食料を幕府に要求する。フェートン号事件
1825	幕府が『異国船打払令(オランダ・中国以外の外国の船を攻撃して追い払う命令)』を出す。
1837	漂流(海に流されてしまった)した日本人7名をアメリカの船が助ける。アメリカ船【モリソン号】に7名を乗せて日本に届けようとする。また、日本に交流を持ちかけようとする。日本は『異国船打払令』によって【モリソン号】を砲撃(攻撃)した。これにより日本国内からも『異国船打払令』に対する批判が強まった。モリソン号事件
1840~1841	『アヘン戦争』で、清(当時の中国)がイギリスに敗れる。清はイギリスに不平等な条約(約束)を結ばされる。世界で最も強いつわっていた清が敗れたことにより、日本やアジアの各国に衝撃(ショック)が広がる。
1842	幕府が『薪水給与令(外国船の来航してきたら、船の燃料や水や食料を出して外国船を援助する命令)』を出す。
1848	アメリカからジェームズ・ビドルが来航し、開国を求めてくる。幕府は断る。
1851	1841年に鳥島(東京の伊豆諸島の島)に漂流した後、アメリカの捕鯨船(クジラを漁する船)に救助されていた日本人「中浜万次郎」が、英語や船の操縦などを学んで日本に帰ってくる。
1853	ペリーが4隻(合計73台の大砲を装備)の船を率いて来航。幕府は1年後に返事することを約束する。 幕府の『【老中】阿部正弘(人物)』がアメリカに対してどうすればいいか、朝廷や公家、大名だけでなく、身分を問わずに意見を述べてよいということを国内に発表、700通以上の意見書が幕府に届く。
1854	ペリーが、9隻の軍艦(合計80台の大砲を装備)を率いて、再び来航。幕府は『日米和親条約』を結ぶ。

この時、ペリーが日本に持ってきた土産(おみやげに)

天皇へのおくり物
電信機2セット(電流や電波で通信する機械) サーフボード
様々な農機具 汽車の模型(1/4サイズ、樹水車・貨車・線路つき)
たくさんの本 アメリカの周辺地図 銀のふたのけしきょう箱
ウィスキー、サクラ酒などの様々な酒 高級紅茶 救命ボート
望遠鏡 調理用ストーフ 高級香水 銃などの武器

幕府へのおくり物 ドレス 金メッキのけしきょう台 香水詰め合わせ

日本とペリーの話し合い担当や【老中】阿部正弘などへのおくり物
動物園 様々な本と鏡 洋酒 時計 ストーフ 紅茶と食糧
小銃やピストルなどの武器 香水詰め合わせ

ペリーの位階は
上の3枚の絵は、江戸のかわら紙の絵師がペリーの顔を想像してかいたものです。

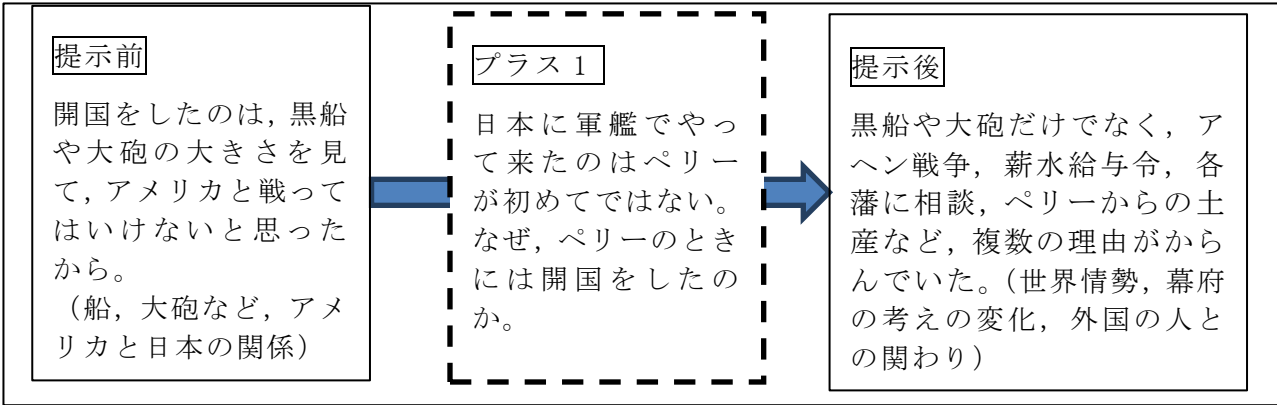


図 11 子供の思考の流れ

4.2 結果の分析と考察

子供たちの変化について、例示した検証授業以外にも、行動観察、発言、ノートなどを中心に継続して記録してきた。

3年生は見学をする機会が度々あったが、事前に見学先でどこを見て、何を調べるのかを子供たちに確認した。目の付け所(見学のポイント)を示すことで見学のメリットは大きくなった。そして、持ち帰った情報から学習を進めていき、プラス1を考えることを通して、これまで考えもしなかった新たな見方・考え方に気付くことができた。このことが次の見学先でも生きて働き、子供たちから多くの発見や疑問が出てくるようになった。

6年生の歴史では時代背景を資料から読み取り、自分の予想を検証した。年表や写真などの資料から読み取れる事実は1つだけではない。子供たちはプラス1が提示されたとき、こ

れまでの引き出しの中から様々な考えを出し、話し合うことで学習を深めてきた。

学年の発達段階に応じた、これまでの学習の概念を翻すようなプラス1の提示で、子供たちの考えが深まっていった。そして、プラス1を提示した学習は1単元の学習での思考に終わるのではなく、次の単元でも多面的な見方・考え方へとつながっていった。また、子供一人一人の経験値が異なるので、それぞれの考えを話し合うことで、さらに学習を深めることができたと言える。

4.3 研究のまとめ

4.3.1 結論

プラス1の提示前と後では子供たちの見方・考え方に変化があり、変化は多面的な見方・考え方へとつながるものであった。プラス1の特性について明らかになったことを3点挙げる。①教科書や載っていないもので、子供たちの普段の生活からは気付くことが難しく、学習内容が深まるもの。②検証する資料や検証方法が確保できるもの。③子供の実態（経験値）によりプラス1の内容を吟味するため、毎年同じプラス1を単元に位置付けることはできないこと。以上の3点が明確になった。加えて、プラス1の妥当性を検証する資料や検証方法は多岐に渡るが、学年や子供の実態に合わせ、子供たちの変容を検証しやすいものを精選するということが大切である。

4.3.2 課題

これまでプラス1の条件を満たし、成立するものを厳選し提示してきた。しかし、子供の実態（経験値）によりプラス1の内容を吟味するため、同じプラス1を単元に位置付けることはできないことが課題である。

また、プラス1を提示しても子供たちの見方・考え方が変化しなかった場合もある。原因として、子供の実態に合っていなかったことが考えられる。1つ目は、子供たちが既に知っている内容であった場合、2つ目は、子供が不思議に感じる要素に欠けている場合である。1つ目に関しては、提示したプラス1をほぼ学級全員が知っていることなのか、一部の子供だけが知っていることなのかによって対応が違ってくる。一部の子供だけが知っていて、やはり全体で考えを深めたいときは用意したプラス1を提示すべきだと考える。さらに、子供たちの実態を把握するという点では、事前にどの程度のことを知っているのか、アンケート調査等で直接聞くことはできないので、探りながら把握していくことが課題である。

4.3.3 今後の展望

プラス1の選定基準と効果について一定の成果を得ることができた。同時に選定基準から表面化したことは、「どの単元でもプラス1を入れ込むことは可能であるものの、条件を満たしたプラス1を毎時間設定することは難しい」ということである。しかし、「プラス1」を設定していないときの学習活動であっても、「自分をとりまく社会や環境に興味をもち、多面的な見方や考え方を身に付ける子供の育成」を行う術は他にもあるのではないか。

今後は、「プラス1」の他にどのような学習活動が効果的なのか、学習活動を考える上で重要な視点は何か。新たなステージへと研究を進め、深めていきたい。

【文献】

- 有田和正（1989）「子供の見方・考え方を鍛える」明治図書
 中田正弘（2013）「社会科授業づくりの基礎・基本」鳥取県教育委員会若手教員授業力向上ゼミナール研修で配布の資料
 文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説 社会編 日本文教出版